

「うまく機能しない」学級にしない学級づくりのための予備調査

—教育学部生への調査を基に—

内野成美（長崎大学大学院教育学研究科）

野崎 徹（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

1. はじめに

近年、文部科学省の調査でも、小学生による暴力行為は年々増加傾向にあることが指摘されている。大阪府では増加する公立小学校での暴力行為への対応を目的として、2016年度から専門家による支援チームを配置する取り組みがなされるとのことである。それと必ずしも並列には扱えないが、授業中の場面においても、授業中にもかかわらず教室内を歩き回ったり、私語をしたりなど学級での学習場面で課題を抱える学校や学級に関する相談は、第一筆者の相談室でも増えているように感じられる。そのような学級の状態に関し、国立教育政策研究所生徒指導研究センターがまとめた「学級運営等の在り方についての調査研究（報告書）」（平成2005年3月）によると、学級がうまく機能しない状況とは「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指示に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し、学級担任による通常的手法では問題解決ができない状態に立ち至っている場合」であると定義されている。さらに、同報告書によると、「平成10年前後から、小学校において授業中の私語、学習意欲の低下、さらに教師への反抗など、授業が成立しがたい状況が現れ」とあるが、学校や学級で多くの時間を過ごす児童生徒にとって、授業が成立しがたい学級の状態は児童生徒のメンタルヘルスや学力向上、規範意識の定着等、その後の成長においても様々な影響を及ぼすものと思われる。そのため、その実態を把握し、そういう状況にならないための予防的対応や早期に対応できる知識や技術を身につけることは教員養成課程の中でも重要な課題と思われる。

2. 研究の目的と方法

学級がうまく機能しない状態、いわゆる「学級崩壊」に関する先行文献の調査においては、そのクラスを教師や保護者の視点から見た論文は多数、見出すことができるが、児童の視点から見た論文は少ない。また、学級崩壊が起こることで、その担任は「なぜこうなってしまったのだろう」と悲観的になり、児童に攻撃的になったり、自分でストレスをため込んで精神疾患に陥るケースも報告されている。そのような状況の中で、学級に在籍する児童生徒の心への負担ははかりしれない。

本研究では、「学級がうまく機能しない状況」に陥らないための学級づくりを目指す実践研究のための予備調査として、教員養成課程の大学2年生～4年生 298名（男性82名、

女性 216 名) に対し、これまでの学校生活の中で学級がうまく機能しない状況の経験の有無、当時の意識、実際に受けた対処法や教師に期待する内容などの検討を行い、児童生徒の側から見た「うまく機能しない」学級に関する意識の実態把握を行うことを目的とする。

3. 結果

まず、学級がうまく機能していない状態の経験の有無について、「有」と回答した学生は 44%であった。また、その時期は、中学 2 年生が最も多く、次いで小学 5 年生であった。

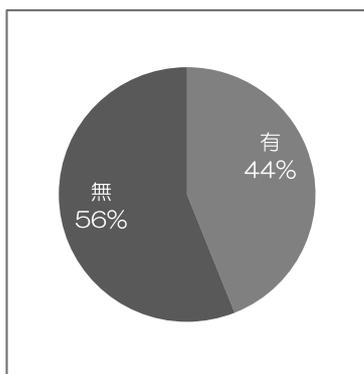


図1 在籍経験の有無

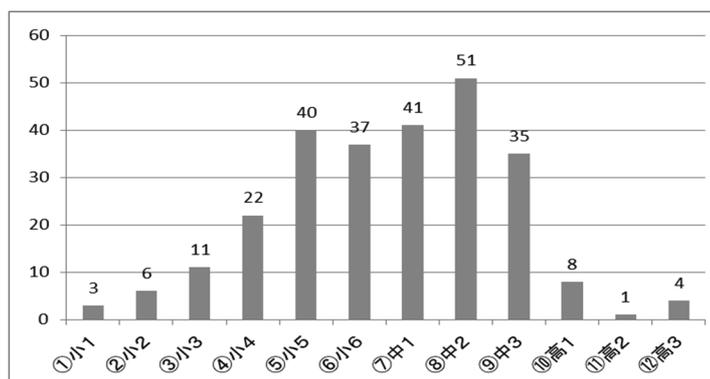


図2 うまく機能しない学級への在籍経験の時期

また、うまく機能しない学級への在籍経験のある学生に対し、最も状態が悪かった、もしくは最も印象に残っている学年の時期を尋ねたところ、図3に示すように、中学 2 年生の時期が最も多く、次いで小学 5 年生、6 年生と続き、小学 5 年生から中学 2 年生までの時期で、全体の 7 割を占めていた。

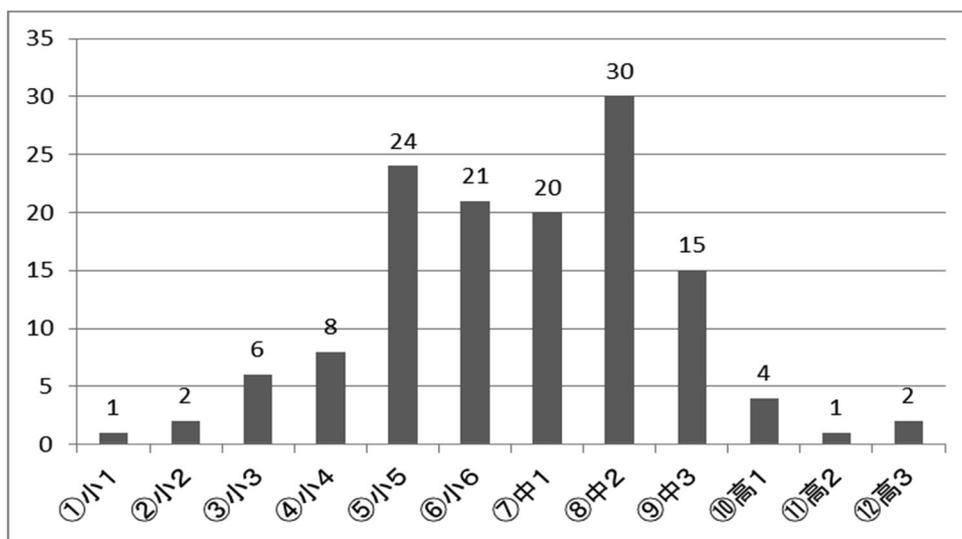


図3 一番状態が悪かった或いは印象的であった学級崩壊状態時の学年
 続いて、その当時の学級の状態を以下の①～⑩の選択肢（複数回答可）で尋ねた結果を

図4に示す。選択肢は以下のとおりである。

- ① 授業と休み時間の区別がつかない
- ② 喧嘩が絶えない
- ③ 特定の児童生徒がいじめられている
- ④ 複数の児童生徒がいじめられている
- ⑤ 教室の雰囲気が悪く、過ごしにくい
- ⑥ 教室にごみが散乱している
- ⑦ 給食当番などの係活動がなされない
- ⑧ 私語や立ち回りで授業が成立しない
- ⑨ 教師に向かって児童生徒が反発する
- ⑩ その他

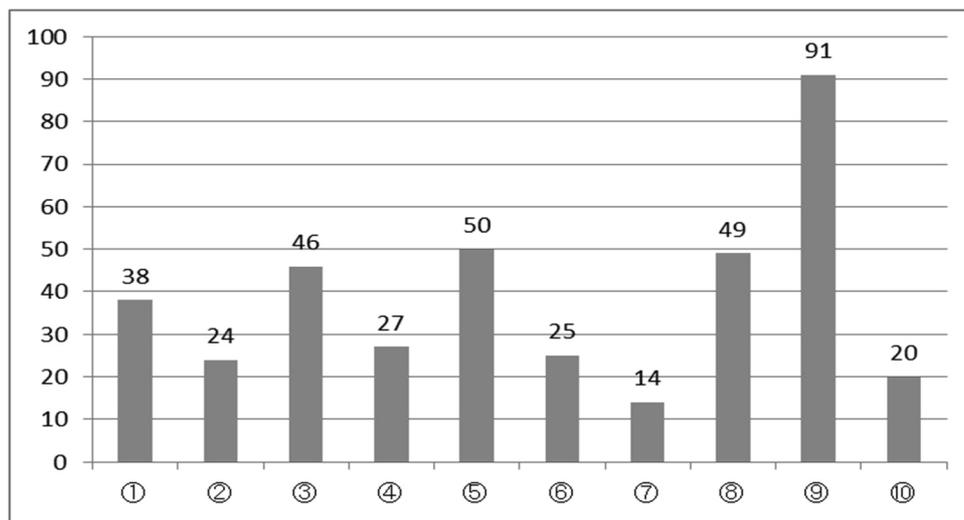


図4 当時の学級の状態

「⑨教師に向かって児童生徒が反発する」と回答した人が 91 人と最も多く、その次が、「⑤教室の雰囲気が悪く過ごしにくい」が 50 人、「⑧私語や立ち回りで授業が成立しない」が 49 人と続いた。その他の意見としては、「お菓子をもってきて授業中に食べる」「教師を教室に入れない」「男子VS女子でぎすぎすしていた」「授業中にゲームをしたり漫画を読んだりして話を聞かない」「欠席の児童生徒が多く、1日10人くらい休みがいた」といった回答が見られた。

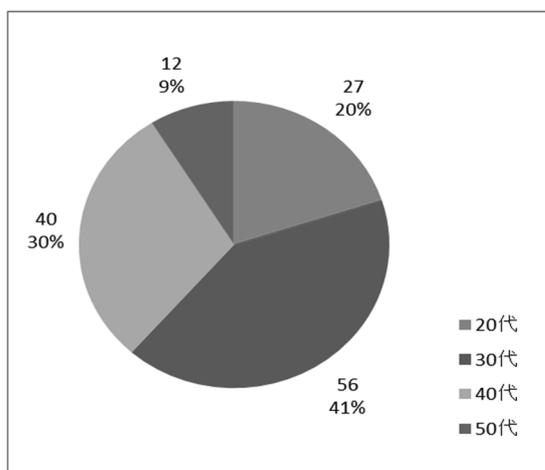


図5 その学級の担任の年齢

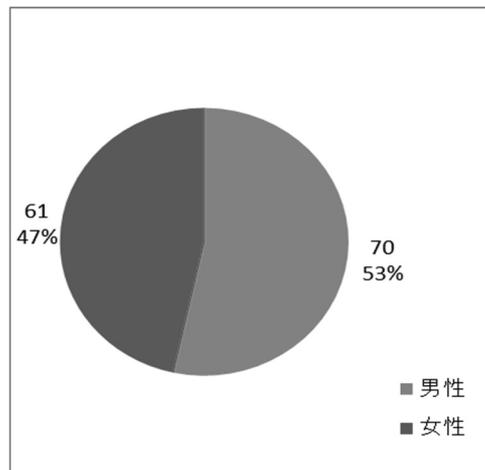


図6 その学級の担任の性別

次に、その学級の担任教師の属性について尋ねたところ、男女差はほとんど見られず、年代的には30代が最も多く、その次が40代であった。担任教師の特徴や児童生徒との関係性などについて、選択及び自由記述で記入してもらくと、好ましかった特徴と好ましくなかった特徴、いずれも挙げられた。好ましかった特徴としては、「優しい」「元気」「叱るところで叱る」「親しみやすい」「威厳がある」「明るい」「授業が分かりやすい」などが挙げられた。また、好ましくなかった特徴としては、「気が弱い」「清潔感がない」「無関心」「言葉遣いが悪い」「頼りない」「男女で扱いが違う」「怒らない」「ほめない」「関わらない」「笑顔がない」「怖くない」「注意ばかり」「すぐ泣く」「理不尽」「授業が分かりづらい」「接しにくい」などが挙げられた。第二執筆者が調査当時、大学生であったため、より率直な意見が挙げられたのではないと思われるが、好ましくない特徴に関し、「先生のほうが張り切りすぎていた」「子どもと良い関係を作ろうと必死なのは伝わってきたが、突然、生徒を1対1で大声を出して怒る姿をみんなは冷たい目で見ていた」「注意ばかりするが、先生として誰も慕っていなかった」「自分の思うようにクラスが動かないと生徒を叱りながらよく泣いていた」「不登校傾向の生徒のことばかり気にしていたので先生が私たちのことを見てくれないのだろうと感じていた」など具体的な意見が多数挙げられた。

次に、学級がうまく機能していない状況が生じた主な要因について尋ねたところ、教師の関わりを挙げる意見が半数であった。

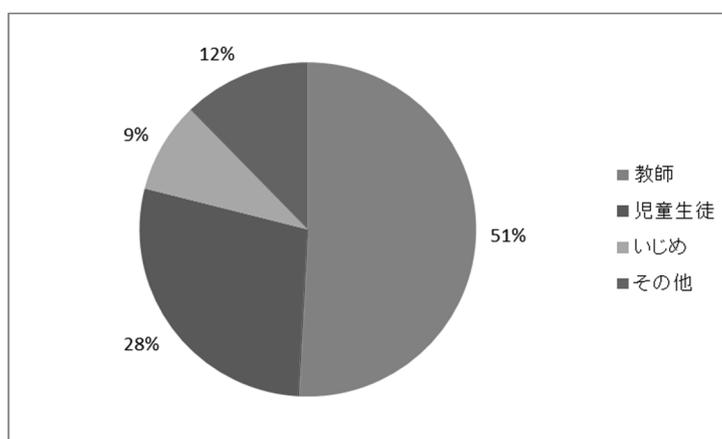


図7 学級がうまく機能しない状態となった要因と考えられる主要な事柄

教師に要因があるとの回答では、「威厳がなかった」「生徒の何人かに反発され、授業中に泣き出したのがきっかけで授業として成り立たなくなっていた」「柔軟な対応が色々な場面でできていなかった」「自分が被害者だと思い、なぜ子どもたちが反発しているのか理解しようとしていなかった」「ルール作りが定着しなかった」「授業が面白くなかった」「公平さがなかった」などが挙げられた。児童生徒に要因があるとの回答では、「クラスに男子の元気があやんな子が多く集まっていた」「反抗する生徒がいた」「仲間はずれがあり、クラスのみんなどもストレスがたまっていた」「わがままと、仲良しグループの対立」「男女仲が

悪い」などが挙げられた。いじめに要因があるとの回答では、「特定の子がいじめられ、そのことを注意した教師が次の標的となり、教師と生徒で関係が築けなかった」という回答が多かった。

さらに、うまく機能していない状態の学級に対し、担任やその他の教師のその後の対応の有無について尋ねると、何らかの対応があったとの回答が47%、なかったとの回答が12%、何らかの対応がなされたかもしれないが自分たちには分からなかったという回答が41%であった(図8)。また、その対応の内容は、以下の通りであり、「①見回りに来る先生が増えた」「④全体で話があった」「⑤違う先生が授業をするようになった(授業の際、複数の先生がいた)」「③個別に話があった」などが多く挙げられた。

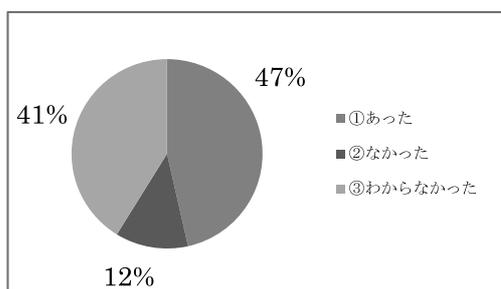


図8 状況悪化後の対応の有無

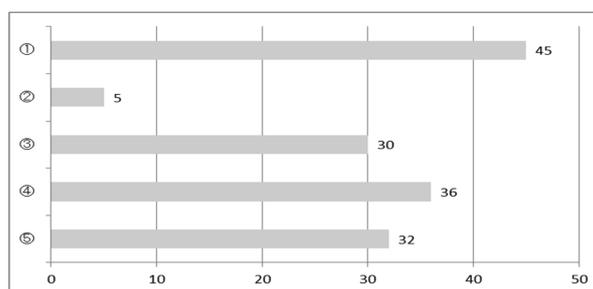


図9 対応の内容

対応の内容の選択肢は以下の通りである。

- ①見回りに来る先生が増えた(教頭・学年主任等)
- ②ほかのクラスとの合同授業があった
- ③個別に話があった(個別指導・カウンセリング等)
- ④全体で話があった(全校集会・学活や帰りの会等)
- ⑤違う先生が授業をするようになった(授業の際複数の先生がいた)

対応後の変化としては、「改善したと感じた」が23%、「悪化した」が4%、「そのまま変わらなかった」が54%という結果となった。また、対応の内容としては、関わる教師の増員や個と全体に働きかけた関わりが挙げられた。

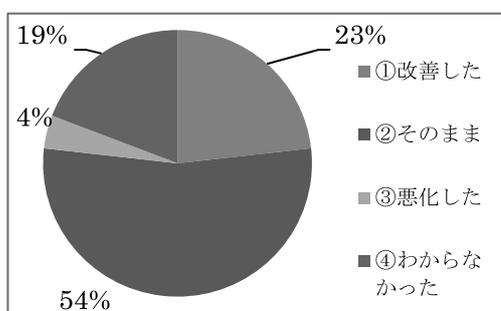


図10 学校の対処の結果の変化

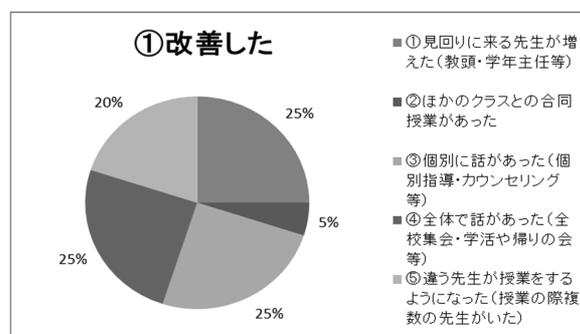


図11 対応によって「改善した」対応の内容

4. 考察

質問紙調査の結果について考察する。

まず、うまく機能していない学級への在籍経験の有無については、4割を超える学生が在籍していたことがあると回答していた。また、その学年は小学校5年生から中学校2年生までの時期で、全体の約7割を占めていた。この時期は、発達のにも思春期の段階であり、心身共に急速に成長し、それまで感じなかった周囲の大人の矛盾に気付いたり、逆に自分の不安や衝動に関し慰めてほしかったりなど、依存と反発が繰り返し起こりやすい時期であるともいえよう。そうした時期に、「ダメなことはダメ」というような毅然とした態度が見えにくかったり、児童生徒の反応に大きく動揺してしまったり、児童生徒の状況に合わせた工夫や対応がなされなかったりすると、その点に反応し、児童生徒はますます動揺し、揺れを大きくしてしまうことにつながった可能性も伺える。

次に、当時の担任教師の属性に関して見てみると、まず、性差は得られなかった。年代に関しては40代が最も多く、続いて30代となっており、10年～20年程度教職を経験し、自分なりの指導法を身に着け、学校内でも重要な役割を担う年代であろうことが推察される。その自負心や多忙さが児童生徒理解に影響していないかどうかについても、今後検討が必要であろうと考える。

『学級経営をめぐる問題の状況とその対応』（文部科学省，2000）において、学級がうまく機能しない状況は、ある1つの原因があつて結果が生まれるのではなく、複合的な要因が積み重なって起こるとし、その1つ1つの要因に丁寧に対応していくことが重要としている。また、学級がうまく機能しない状況として以下の内容を挙げている。

ア. 「学級がうまく機能しない状況」をもたらす背景

- 学級担任の状況、学校の状況
- 子どもの生活、人間関係の変化
- 家庭・地域社会の教育力の低下
- 現代社会の問題状況と教育課題

イ. 「学級がうまく機能しない状況」の直接的な要因

- 子どもの集団生活や人間関係の未熟さの問題
- 特別な教育的配慮や支援を必要とする子どもへの対応の問題
- 学級担任の指導力不足の問題

今回の質問紙調査においても、教師への反発や児童生徒の私語や立ち回り、学級の雰囲気悪さなどが挙げられており、内容として重なる部分が多い。また、学級がうまく機能しないような状況に陥った主な要因として、全体の半数程度の回答に教師の対応が挙げられており、学級の児童生徒に対する教師の対応の重要性が示唆されている。

悪化後の対応を見ると、学校の対処としては、「見回りに来る先生が増えた」「個別に話が

あった」「全体で話があった」などが挙げられており、担任教師だけでなく、複数の教師で個と全体に対応することの重要性が示唆されている。しかし、それでも状態が改善したと明確に感じられたケースは2割程度であり、いったん状況が悪化すると、どのように多くの対処をしようとしても改善が難しいことが予想される。しかし、一方で対処後に「悪化した」と感じたケースは4%であり、対処をすること自体がまず児童生徒の状況の改善あるいは現状維持につながるということが示されている。それ以上悪くならなかった、と振り返って思う気持ちは、当時の子どもたちの大人への信頼感の回復へもつながったのではないかと推察される。

5. まとめと今後の課題

本研究では、「学級がうまく機能しない状況」を経験した大学生に対して、その状況を振り返ってもらい、当時の状況や意識についての調査を行った。その中で、学級づくりに関するいくつかの示唆を得ることができたと考える。

今後は、この調査結果をもとに、学級がうまく機能するための学級づくりの実践例を検討し、そのために教師ができる具体的な方策を提案していきたいと考える。

引用・参考文献・資料

- 佐藤 学 「学級王国」の崩壊としての「学級崩壊」(『学級崩壊』を考える)
教育心理学会年報 39, p7 日本教育心理学会 2000
- 尾木 直樹 『「学級崩壊」をどうみるか』 NHKブックス, 1999
- 杉山 雅彦 『「学級崩壊」という相互作用への介入(『学級崩壊』を考える)』
日本教育心理学会総会発表論文集 41, p5 日本教育心理学会 1999
- 石隈利紀 『学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス』 誠信書房, 1999
- 坂本昇一 『「学級崩壊」克服の学校経営』 教育開発研究所, 2000
- 加藤弘通、大久保智生 「〈問題行動〉をする生徒および学校生活に対する生徒の評価と学級の荒れとの関係 〈困難学級〉と〈通常学級〉の比較から」教育心理学研究
vol. 54 pp. 34-44 2006
- 深谷昌志他 『授業の荒れ(生徒調査)』モノグラフ・中学生の世界
vol. 63 pp2-99 ベネッセ教育研究所 2000
- 小林正幸 『学級再生』講談社, 2001

- 河村茂雄 『学級ソーシャル・スキル CSS』 図書文化, 2007
- 原田正文 『不登校・キレ・いじめ・学級崩壊はなぜ：小学生の心が見える本』
健康双書, 2007
- 加藤弘通 『問題行動と学校の荒れ』 ナカニシヤ出版, 2007
- 小松郁夫 『学級経営をめぐる問題の現状とその対応 ―関係者間の信頼と連携による魅力ある学校づくり―』 国立教育研究所広報第 124 号, 2001
- 文部科学省 『いわゆる「学級崩壊」について ～『学級経営の充実に関する調査研究』
(最終報告)の概要～』 2000
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad200001/hpad200001_2_043.html
- 文部科学省 「幼児教育振興プログラム」 2003
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/07121721/001.htm
- 現下の教育課題への対応～教育の機会の確保と質の向上～
文部科学省 - 2010 年
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200901/detail/1296569.htm
- 「学級運営等の在り方についての調査研究」報告書 国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2005